

平成 27 年度 薬剤学教科担当教員会議 議事録

日時；平成 27 年 8 月 28 日（金） 13:30～17:15

場所；立命館大学大阪茨木キャンパス（〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町 2-150）

出席者；

1. 委員長、副委員長、初参加の先生ご紹介

会議は定刻通り開始された。まず、委員長の藤田卓也先生（立命館大）から開催の挨拶があった。続いて、副委員長の灘井 雅行先生（名城大）、森部 久仁一先生（千葉大）から挨拶があった後、本会議に初参加の先生方から簡単な自己紹介をいただいた。

2. 「第 100 回薬剤師国家試験問題検討委員会「薬剤」部会報告」（資料別添）

齊藤浩司先生（北海道医療大）

齊藤先生は、5 月 30 日ポールスター札幌で開催された第 100 回薬剤師国家試験問題検討委員会「薬剤」部会で討議された内容と評価結果について報告された。総合的にみると適切な問題が多かったという評価が多く、多くの大学から寄せられた一方で、10 校以上が「授業で教えていない」という問題が 8 問あったように、難易度が極端に高い問題や細かい内容を問い過ぎている問題が出題されていたことが指摘された。国家試験全体については、国家試験当日に問題訂正が 9 問もあったため、学生の混乱を防ぐためにも厳格な問題作成を求める意見が述べられた。さらに、10 問以上が補正対象問題となったことにより、国家試験合格発表以前に自己採点で不合格と判断した学生が就職内定を辞退し、医療現場が混乱したことが指摘され、厚生労働省に対して配慮をもとめる声が上げられた。全体に対する評価の後、問題が指摘された項目ごとに実際の問題を取り上げて解説された。

3. 「第 100 回薬剤師国家試験について、複合問題の評価を中心に」（資料別添）

三原潔先生（武蔵野大）

三原先生は、実務サイドから複合問題を評価した結果について報告された。総合的にみると、症例数が多い事例や臨床的に重要な課題(問題)が出題されており、問題として妥当であった旨が述べられた。一方で、ガイドラインから逸脱したような非現実的な治療法を問う問題や科学的根拠のない問題が一部出題されていることに対する指摘がなされた。続いて、複合問題の在り方として、シナリオや前後の問題と関連性のない問題が複数出題されていたことが指摘された。最後に、国家試験問題と受験者の学力のミスマッチについて述べられた。大学入試科目として国語や物理、生物がないことにより国家試験が要求する資質を満たしていない学生が大学に入学しているため、各大学がアドミッション・ポリシーを見直すべきと強調されていた。

4. 特別講演 I 「薬剤学・薬物動態学の研究・教育を振り返って」(資料別添)

中島恵美先生(慶應義塾大)

中島先生は本年度、慶應義塾大学薬学部で定年退職を迎えられることから、これまでに携わってきた研究・教育の概要について紹介された。中島先生は、全人類の健康天寿達成を夢に、個別薬剤療法をライフワークとしてこれまで研究を続けてこられ、まず、2000年前後に着手された「胎盤輸送研究」について紹介された。当時、胎盤に機能的関門が存在するかどうかは明らかにされておらず、また、アニマルスケールアップの研究も少なかったため、*in vitro* 輸送実験系の構築や胎盤染色による輸送担体局在の解析、*in vivo* ラット ADME 解析など幅広い研究を行い、世界で初めてのラット胎盤関門細胞株の樹立や、胎盤における輸送担体の発現の確認、輸送担体関与と変動の時期特異性と種差の解析に成功した事例について報告された。続いて、PK/PD の個別化要因として「脳活動」に着目して研究を行った内容について紹介された。抗菌剤や鎮痛剤においては患者の血中濃度と薬理効果に相関がない場合があることから、脳活動が薬効に関与していると考え、プラセボ効果を生む出す遺伝子の解析やストレス抵抗力に関与する細胞の活性についての研究に取り組み、その成果を紹介された。最後に、今後は脳活動と身体反応の生化学的解析研究が必要となることを述べられた。

5. 特別講演 II 「薬事行政をめぐる最近の話題」(資料別添)

橋田充先生(京都大)

橋田先生は、ご自身が会員として活動されている 4 つの組織・会議で議論された薬事行政に関する最新の話題について紹介された。まず、日本学術会議における政府に対する政策提言として、6 年制薬学教育とその後の大学院教育の在り方、レギュラとリーサイエンスを基盤とした研究の高度化、薬剤師の職能とこれを支える薬学研究の在り方などについて説明された。次に、文部科学省に属する薬学系人材養成の在り方に関する検討会において、薬学教育モデル・コアカリキュラムの改定や実務実習に関するガイドラインなどの話題が議論された旨を報告された後、薬事・食品衛生審議会で討議された「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」の施行や第十七改正日本薬局方の概要などについて紹介された。最後に、国際薬学連合におけるこれまでの会議やワークショップなどの活動の概要を説明され、薬学研究者および薬剤師の国際化の重要性を強調されていた。

6. 総括

本年度委員長より、本委員会参加者に対するお礼が述べられた後、来年度は、次期薬剤学教科担当教員会議委員長が千葉大学薬学部・森部 久仁一先生となり、東京(千葉)で開催予定であることの紹介があり、会議を終了した。